

なんて素敵な政略結婚

プロローグ 奥さん、爆発する。

私——倉木桜は、結婚に、夢も理想も抱いておりません。

結婚とは人と人を繋ぐものではなく、家と家——すなわち会社と会社の結び付きをより強固にするためのもの。そういった教育を、幼少期より嫌というほど受けて参りました。

そこに夢や理想など、持つてはならない。ええ、わかっておりますとも。

ですから、九ヶ月前にお父様から彼を紹介された時、「ああ、私はこの方と結婚するのだな」と特別な言葉はなくとも把握したのです。

私の旦那様となるお方は端正なお顔立ちをしており、背も高く、装いも素敵でございました。同時に、二十七歳という実際の年齢よりもお若く感じたことを、よく覚えております。

二十四になっても童顔で子供扱いされることの多い私ですから、その点においては親近感を抱いたものです。

しかし、大きく異なる点もございます。私たちは御曹司と社長令嬢。境遇は似通っておりますが、彼のお家と私の生家は家格が段違いなのです。私には、勿体ないお相手——。ええ、ええ、十二分にわかっておりますとも。

父がどのような伝手を駆使して取り付けたのか、疑問に感じてしまうほどの、この縁談。私はすべての事情を察し、納得して、結婚を了承致しました。

初めて彼にお目にかかったあの日から結婚式までの期間は、約三ヶ月ほど。その間、ふたりだけでお会いしたのは三度きりです。

笑顔ひとつ見せない彼と、どうコミュニケーションを取ればよいのかわからず、然したる会話もないまま盛大な結婚式が執り行われ、あれよあれよという間に、私は水嶋桜となりました。

そして夏が過ぎて、秋も終わりに近付いて参りました今日この頃。

入籍と同時にふたりでの生活を始めてから、半年の月日が流れました。

出会ってからの九ヶ月で、(書類上の)旦那様である彼と言葉を交わしたのは数えるほどでございます。あえて「書類上の」と付けたのは、世に言うような近い仲ではないからです。

彼はとても誠実な方ですから、家を空ける日が多いとか、私に辛く当たるとか、そういったことは一切ございません。

ただただ、酷く無口でいらつしやるのです。

お義父様の会社で働かれています彼は、毎日お忙しい様子。

しかし、少しでも早くご帰宅できるように配慮して下さっているそうです。お義父様より、そのように伝え聞いております。

専業主婦の私が寂しい思いをしないように、今日も――

「おかえりなさい」

「ああ」

いつもと同じ時刻に帰宅された彼の手には、白い箱が握られております。

玄関でお出迎えした私は、無言ですつと差し出された箱を受け取り、深々と頭を下げました。

「ありがとうございます」

中身をそつと覗き見ると、そこには大好物のケーキが。彼はよく、こうしてお土産を買ってきて下さるのです。そしてその頻度は、ここへ来てどんどん高くなっております。彼自身は、甘いものが苦手にも拘わらず。

彼がこのケーキを口にすることはありません。ですから、必然的に私ひとりで食べることになりました。ここ最近、お腹のお肉が多少気になるようになった理由は……、考えるまでもないでしょう。

「明日のおやつに頂きますね」

無表情でこくりと頷いた(書類上の)旦那様は、そのままお風呂場へと向かわれました。

帰宅後、彼はどうかしてか、必ずお風呂場へと直行されるのです。

そこにあるのは綺麗に磨き上げたお風呂。掃除したのは、もちろん私です。

結婚したからには、専業主婦である私が家事を担うべきであると考えております。

ですから、お手伝いさんはお願ひしていません。

しかし、そんなピカピカお風呂を見て、彼は毎日お約束のようにため息を吐かれます。

私が廊下を歩いて彼を追いかけると――

「……はあ」

まあまあ、今日も今日とて大きなため息を吐かれました。

……って、なんでなの!?

いいえ、盛大なツッコミは、ぐっとこらえて呑み込みましょう。

私には、やるべきことがあるのですから。

わざわざ浴室の中へ入り、無表情で浴槽を眺め続けている彼に問いかけます。

「お食事、すぐに食べられるよう準備しますね」

「やらなくていい」

「でも……」

「俺がやるから」

「……チツ」

あらいけない、私ったら。(書類上の) 旦那様に舌打ちだなんて。

私の放った舌打ちが聞こえているか定かではありませんが、彼は無言で私の横を通り抜けて、

キッチンへと向かわれました。

私もあとをついていきます。キッチンに繋がっている廊下のスライドドアを開けると、IHコン

ロに向かう彼の姿がありました。

お風呂場からのキッチン、固定ルートです。毎日毎日規則正し過ぎて涙が出そうになります。

私としては、夕飯をお食べになるのかという質問も兼ねて、お食事の準備を始めると表明してお
りますのに、彼はどうか毎晩ご自分で用意なさろうとするのです。

そして一言目にも二言目にも、やらなくていい、やらなくていいと……。お腹がいつぱいだから
必要ないと言っているのか、食事はしたいが準備は自分ですと言いたいのか、よくわからないの
です。実はこれには、大変困っておりますのよ。

と、言いますのも、私のお父様は取引先の方と会食をなさって帰宅されることが多い方でござ
いました。ですが、我が家の太陽でもあるお母様は、気まぐれにキッチンに立つと、会食の有無
を問うことなく、「今日のご飯は自信作っ!」と帰宅したお父様にタックルをお見舞いし——そし
て、とても個性的な料理を涙目で食べるお父様を、それはそれは幸せそうに見つめていました。え
え、わかっております。満腹でまず……。いえ、個性的な料理を食べれば、そりゃ涙目にもなりま
しょう。

ですから、いくら頑張っても、無理強いしてはいけない。断る選択肢も用意して差し上げ
なければならぬと、両親の姿を見て、私は学んだのです。

だからこそ必要のない時には断っていただけけるよう、仕上げの前に声をかけているのですが、
きつと彼にはその意図が一ミクロンも伝わっておりません。

食事の要不要については、帰宅のご連絡を下さる際に確認しておりますのに、今まで一度もご
返信をいただいたことはないのです。

それでも、毎日毎日、多少文面の違った『今から帰る』というご連絡を、(書類上の) 旦那様が
欠かすことはありません。『なにか必要なものはあるか』と、帰宅途中のおつかいまで買って出
て下さるのです。

その他にも、氣遣っていたいただいているのだと実感する機会は多くございます。

例えば、休日には私が買い物へ出ようとすると、必ず彼自ら運転をして、激安スーパーや、ドラッグストアに付き合っただけだったり。

共にテレビ鑑賞をしている際に、私がなんとなく「かわいいですね」と言ったものを、後日取り寄せて下さったり。おかげで、うっかりなにかをかわいいと言わぬよう注意するという、新たな習慣ができました。

そんな（書類上の）旦那様ですが、家事に関しては、非常に頑固でいらつしやいます。今日もフライパンを手に、私が下ごしらえを済ませたお肉を勝手に焼き始めやがりました。

どうしてでしょう。

どうして彼は、私から家事を取り上げようとするのでしょうか。

私の作った食事が、お気に召さないのかしら。

それならそれで、はつきりと仰っていたいただきたいのです。

意見のすり合わせをしたいからこそ、結婚当初から盛んに声をかけておりますのに、ずっと無視しやがって、ちつくしうこの野郎……なんて、いやだ私ったら、はしたない。

「私が、やります」

私の言葉に、彼は眉ひとつ動かしません。無視です、無視。聞かえているのに返事もしてくれません。

私はただ、家の仕事を全うしたいだけなのです。

家のことは任せていただきたい。自分の手で家事をやり遂げたいのです。

なのに――

「やらなくていい」

「はい？」

「なにもなくていいから。ゆっくりしてろ」

彼が文字数多めにお話しされました。珍しいこともあるものです。

ゆっくり？ ゆっくりですか。

専業主婦で一日中おうちにいる私に、家事をするなど、なにもするなどと。退屈は人を殺すというのに、暇ぼかーんで過ごせと！ つまり私に死ねと！ そう仰られていると解釈して構わないでしょうか。

私はこの半年間、寝ても覚めてもずっと疑問に思っているのです。

何度尋ねても華麗に聞こえないふりをされてきましたけれど、今夜こそ、その理由を聞かせていただきます。どうして、私が家事をしてはいけないのでしょうか。

「なぜですか？」

肉の焼けるいい香りが、私の鼻を掠めていきます。そして耳に届くのは肉の焼ける素敵な音。

（書類上の）旦那様の声は全く聞こえません。まただんまりのようです。

「どうして、私が家のことをしてはいけないのですか？」

今日は絶対に諦めないぞと気合いを入れて、もう一度彼に声をかけます。

慣れた手つきでフランパンを揺する彼が、ちらりと視線を寄越しました。

なのに、待てど暮らせどその口元は動きません。やっぱり、ちっとも喋ってくれません。

——もう、だめだ。

丁寧は丁寧に接してきたつもりだったけど、それも限界……！

無視され続けることが、どんなに切ない怒りを連れてくるか、彼はご存知だろうか。

家事をしてはいけない理由を話してもらえないし、私が家事をしたい理由を聞いてもくれない。

溜まりに溜まった鬱憤が胸の中をぐるぐると暴れ回る。

「おかしな話だ」「おかえりなさい」と言われたら「ああ」「じゃないでしょう」「たがいま」でしょう！

「ご飯を食べる前だ」「いただきます」と、ちゃんと言葉にするべきだ。挨拶なんて基本中の基本だし、無駄にいい声してるんだから、もつと積極的に喉を使えばいいのに。宝の持ち腐れ！

——結婚なんて、夢も理想も持っていない。

全体的にアホだけ娘思いでもある父のことだから、会社の利になって、かつ浮気とかしなそうなの、真面目なタイプの男性を結婚相手として連れて来るのだからわかってた。

祖父の代に大きくなってしまった会社をつぶさないためには、政略結婚が一番でっとり早く安定を得られるのだと、理解している。

かわいい妹と弟を路頭に迷わせないためにも、いくつになってもぼんやりしている母を野垂れ死にさせないためにも。私が結婚することで、父の会社に巨大なうしろ盾が得られるのなら、喜んで駒になる。これまでもこれからも、その思いは変わらない。

変わらないけれど。みんな、ごめん。私もう、いい加減限界！

「燈哉さん！」

ジェスチャーでの会話を好む彼が、くいつと首を傾げた。

「はつきり仰っていただかないと、わかりません！」

「……ああ」

「だからっ、ああ、じゃなくて！」

溜まりに溜まったストレスは、今や私の心のほとんどを占めている。それが爆発する音が、耳の奥で聞こえたような気がした。

乱暴な足音を立てて彼に近付き、思い切り睨み付ける。私より三十センチほど背が高い彼に、なんとなく見下されているような気もするけれど、それは私がミニサイズなのも原因だから仕方ない。

「どうして私が家事をしちゃいけないんですか!? 何回も何回も、なんつつかいかいも聞いているじゃない！ ジェスチャーやため息じゃなくて、言葉にしてちゃんと行って下さい！ わっかんないから!!」

丁寧な言葉遣いも控えめな態度もかなぐり捨て、私は初めて素の状態ですら怒りを露わにした。

私の叫び声に、彼が驚いたように目を丸くする。日常的にあまりにも無表情なため、たったそれだけでも表情が動いたと感じてしまう自分が憎い。

無口で無表情で、ため息とジェスチャーでの会話がデフォルトな、挨拶ひとつできない（書類上の）旦那様。

いくら無口とはいえ限度があるし、意思の疎通が凶れなすぎて本当にイライラする。今の生活は、結婚に「？」マークが付き、旦那さんに「書類上の」という注意書きが必要な状態だ。

結婚に夢や理想なんて持っていないけれど、共に生活をしていく上で不都合がありすぎる。せめてお互いの考えていることを多少でも意見交換できるくらいには、なりたい。いくらこちらの立場が弱い政略結婚とはいえ、過ぎた願いではないはずだ。

こうなったら、しつこくしつこくコミュニケーションを取り続けて、どうしても私に家事をやらせない理由をべらっぺら喋らせてやろうじゃないか。私がストレスで死ぬ前に！

最終的には「おはよう」から「おやすみ」まで、彼のほうから声をかけてくるくらいに、喋ってもらうんだから。いつかお腹を抱えて爆笑する姿も拝んでやるんだ。あの無表情が破顔したらきつとすごく愉快だろう。主に私が。

目指せっ、ため息で返事されない日々！と、私は胸の内を高々と拳をつき上げた。

かくして、(書類上の)旦那様との戦いの火蓋が切られたのである。ものすごく一方的に。

1 奥さん、釣書きを思い出す。

さあ、さっそくコミュニケーションを取ろうと、私が口を開こうとしたその時。

どういう理由か、彼はIHコンロの電源を落とし、私に背を向けた。

「えっ……っ？」

そしてそのまま、キッチンを出て行くこうとする。

「燈哉さん!？」

慌てて呼び止めると、燈哉さんは一瞬だけ立ち止まって、ちらりとこちらを振り返った。その表情は硬く、酷く顔色が悪い。これはもしかや、怒らせてしまったのかもしれない。

それならそれで、彼の言い分を、ぜひとも聞かせてほしい。

私は黙ったままで、彼の発言を待った。

なのに、彼は結局、ため息とジェスチャーすら残さずキッチンから出て行ってしまった。どうやら寝室へ向かったようだ。

だから、なんつでだんまりなの……！ 怒っているなら、はつきり言ってくればいいのに。できることならば私もついて行って、やり場のない苛々を寝室の扉に思い切りぶつけてやりたい気分だ。思いっ切り扉を蹴り飛ばしたら、ちよつとはすつきりするんじゃないだろうか。

けれどそんな D V 妻みたいな真似をしたらコミュニケーションどころではなくなってしまうので、ぐつと堪えて食事の支度に取りかかった。

彼が特注したというドイツ製のシステムキッチンは、世界でも最高級と謳われるだけあって機能性が高い。シックなデザインはリビングとのバランスもよく、なんとと言っても無駄に広々として

結婚前、得意料理は鍋だと言い張っていた私には、それこそ宝の持ち腐れだ。多少慣れたとはいえ、ふと我に返るとげんなりしてしまう。

彼の生家には遠く及ばずとも、私も贅沢な環境で暮らしてきた身だ。

実家にはお手伝いさんもいるし、専属の調理師さんや庭師さんもいる。それから子供それぞれに、送迎の車をつけてもらっていた時期もある。小さい頃は、それが当たり前だと思っていた。

なのに私は、常にどこか居心地の悪さを感じていて……。家族もうちで働く人も大好きだったから、それがどうしてなのか、ずっとわからなかった。

その理由を正しく理解したのは、成長して色々な世界を知ってから。

いわゆるお金持ちの生活が性に合わず、世間で「贅沢」とされているものが好きじゃないのだと気付いた時には、心から安堵したのを覚えている。実家の居心地が悪いのも当然だと思えたからだ。妹と弟には、高価なものを好まない私不思議な生き物に見えていたようだし、口には出さずとも、両親も内心で首を傾げていたはず。

それでも家族は、異なる価値観を持つ私を笑い飛ばさずに受け入れてくれた。それについては多大なる感謝と恩を感じている。

幼稚園から大学まで通ったエスカレーター式的女子校生活では、不思議どころか最早珍獣扱いだった。とはいえ私も、ブルジョワ意識が極めて強い同級生たちにもちっとも馴染めなかったので、距離があるくらいがちょうどいいと思っていた。

それにたった一人の友達が割と個性の強い——あらゆる意味で最強の人だったから、寂しさを感

じる暇もなく、楽しい学校生活を送れたと思う。

大学卒業後は、実家の事業とは全く関係のない会社に就職した。

どうしても自分のお給料で暮らしていける範囲でひとり暮らしがしたくて、反対を押し切って家を出たのだ。結婚が決まったら仕事を辞めて家に戻る、という約束を交わして。

そのひとり暮らしをしていた約二年間が、私の人生でもっとも光り輝いていた期間だったと言っても過言ではない。

自分のことは自分でやって、お嬢さんでいることを強要されない生活。

自分で稼いだお金で、自分を養う生活。

ごく一般的な感覚を持つ職場の人々に囲まれ、ようやく出会えたごく一般的な金銭感覚を持つ同僚たちと楽しく遊び、ごく一般的な感覚の私を認めてくれる、学生時代からの唯一の友人と休日を通ぐす、あの充実感と言ったら。

それまで感じていた居心地の悪さとか、心の渴きみたいなのが綺麗さっぱりなくなり、身も心も潤いに満ち溢れた、とても幸せな毎日だった。

そんなつい半年前までの日常が、遠い昔のように感じる。

ああ、懐かしいな、六畳一間のワンルームアパート。

こんな煌びやかなマンションじゃなくてさ、無駄に空間使ってなくてさ、手の届く範囲にほしい物が揃っててさ……

楽しかったな、職場の友達たちとやった鍋パーティー。

こんな馬鹿高い牛肉じゃなくてさ、グラム八十八円の豚肉を買い求めて、きやつきやと盛り上がってさ、節約レシピを披露し合ったりしてさ……

現在の住まいは、都内一等地に建つ豪華なマンションの一室だ。インテリアコーディネーターが仕上げたりビングを見渡して、私は重い重いため息を吐いた。

I Hコンロの火を止めて、焼き上がったお肉をお皿にうつす。彼はまだ寝室に籠城したままで、出てくる気配はない。キッチンから廊下に繋がるスライドドアを抜け、寝室を指して長い廊下を進んだ。

ちなみに、先ほど彼はわざわざリビングのほうから廊下に回って、寝室へと向かった。私を避けて遠回りしたのである。開け放したスライドドアから背を丸めて歩く姿が見えた時には、なんだか微妙な気持ちになった。

私の（書類上の）旦那様である水嶋燈哉さんは、父が見つけてきたお見合い相手だ。

紹介された時点で結婚することはほぼ決まっていたので、お見合い相手ではなく政略結婚相手と言ったほうが正しいかもしれない。

「紹介したい人がいる」と、父から彼の写真を見せられた時、私は啞然とした。

はつきりとした顔立ちそのものはもちろんのこと、印象的な丸い瞳や高い鼻梁、眉や唇の形に至るまで、すべてのパーツが完璧に整ったその容姿に、驚いてそつと写真を裏返してしまった。ちなみにキラキラした人間と生活を共にするのかと想像しただけで、疲労を感じたほどだ。

そして、後日彼の正式な釣書きを手にした時には、不安で白目になり、半笑いを浮かべてしまった。彼は容姿だけでなく、中身もすごかったのだ。年齢は二十七歳。私と同じ幼稚園から高校までエスカレーター式の、あちらは男子校に通い、アメリカに留学していたこともあるそうだ。資格欄には、普通自動車免許と並んで家用操縦士免許と記されていたのも覚えている。男性のロマンなんてわからない私はそれを見て、趣味で飛行機操縦って、どこでどうやればできるんですか……？ と思ってしまう。家用飛行機という発想が金持ち過ぎて怖い。

趣味の欄もそうだ。ヨット、モータースポーツと書いてあった。とにかくお金のかかりそうな趣味だと思いつながら、半笑いで読み飛ばしたのは言うまでもない。

その時点で私のテンションは地中深くまで下がっていたけれど、しかし最終的にはいくらか持ち直した。釣書きの最後に、彼もまた大学卒業と同時に実家を出てひとり暮らしをしていた、という記述を発見したからだ。

お手伝いさんをつけずに生活をしていたので家事能力には自信がある、と書かれた一文に、私の心は多少躍った。

ああ、もしかししたら、私と同じように傳かれる生活は嫌いで、一緒にお鍋とか囲んでくれちゃうかもしれない……、と。

残念ながら、持ち直した気持ちは彼と対面したその日に碎け散りましたが。

お見合いの席での燈哉さんは、今と同じく終始無表情で、全く喋らない癖にやたら私の顔をじつと見てくる、なにを考えているのかさっぱりわからない不思議な人だった。

今は多少慣れたけれど、人の顔を凝視するのはどうやら彼の癖のようなものらしい。あの小綺麗（こぎれい）な顔で見つめられると、居たたまれない気分になるから、よしていただきたい、切実に。

「燈哉さん。お食事の準備ができました」

寢室の扉をノックして、彼の返事を待つ。

「燈哉さん」

しばらく待っても返事がなかったため、控えめに再度声をかけた。

（書類上の）旦那様が、私に家事をさせたくないと思ってるのはわかっている。

でも私だって、この生活にただただ胡坐（あぐら）をかいているのは嫌なのだ。毎日毎日、暇ぼかーんで過

ごすのも、反応してもらえない質問に自分で答えるのも、もう嫌だ！

「今日はお食べにならないのですか」

まずは彼の言い分も聞いて、意見のすり合わせをしたいのに、また返事もしてもらえない。

寢室の扉に左耳をつけて、中の音を拾おうと試みる。

「私の作ったものを食べたくないのなら、はつきりそう仰（おん）つて下さい！」

いい加減焦（こ）れた私が声を張ると、急に、とんでもない勢いで、寢室の扉が開いた。

そしてその扉は、ごんつ、というわかりやすい音を立てて私の頭を直撃した。私は扉に対して横

を向いていたので、耳の上辺りに見事クリーンヒットしたのだ。地味に痛い。

「ご、ごめん！」

（書類上の）旦那様はおろおろと焦った様子で目を見開いている。彼から謝罪の言葉を聞くのも、

日に二度も表情が変わる瞬間を目にするのも、初めてかもしれない。

「いえ、扉の前に立っていた私が悪いので。お食事はどうぞされますか」

「た、食べる！」

「そうですか。では、先に席へ着いていらして下さい」

「ああ、っ、いや、……」

ああ、いや、とは一体。私はいまだ痛む頭を自分で撫（な）でながら、彼に向かって殊更（ことごと）きと微笑んで見せた。

すると彼は、なぜか口元を押さえて、途方に暮れたように顔を伏せてしまう。

「すぐに用意しますね」

もうお肉冷めちゃってるだろうけど知らないからね。

笑顔の裏でこっそり毒を吐くと、どうしてか彼の頬が赤く染まっていく。どうやら照れているようだ。なんでこのタイミングで照れるのか、全く意味がわからない。

私は首を捻（ひね）りつつも、彼と一緒にダイニングへ向かった。それから温め直した料理をダイニングテーブルに並べて、彼の向かいの席に腰を下ろす。

いつも通りすぐに食べ始めようとした彼に、私はまた意識的に笑顔を作って声をかけた。

「燈哉さん」

優雅な所作で肉に箸を伸ばしていた彼が、その手を止めてじいっと私の目を見る。

「いただきますって、言ってくれませんか？」

ずっと、気になっていた。彼が「いただきます」と言わないでご飯を食べ始めることが。私の実家では、「いただきます！」と全員で声を揃えて言ってから食事をする。それは父が私たちに強制しているからこそ、今も続いている習慣だ。

全体的にアホな父に「せーのっ」などと言われると、ものすごくげんなりするのでそこまでする必要はないけれど、挨拶は大事だと思う。

それに食事前の挨拶は、作り手への感謝だけではなく、命の恵みに感謝する意味も込められているのだから。

動物や植物の命をもらって人間は生きている。当たり前なことだけれど、その恵みに、感謝の気持ち忘れてはいけないと思う。それが私の持論だ。

「挨拶は、きちんと声に出してくれたら嬉しいです」

「……っ、わ、わかった」

意外にも素直な返答に、一瞬きよんとしてしまった。

どうせ無視されるだろうと次の言葉を用意していたので、拍子抜けしてしまったのだ。

いただきますと口にするのが恥ずかしいのか、彼は耳まで赤くし、テーブルに肘をついて項垂れている。そんな彼に、なんとなく微笑みを向け続けてみた。

「……いただきます」

酷く神妙に、とても小さな声で、でも真つ直ぐにこちらを見て彼が呟く。

「はい、どうぞ召し上がれ」

視線を合わせて私が返事をする、挙動不審な燈哉さんは、さつとそっぽを向いた。

——なにを考えているのかよくわからない人だけれど、少しずつ歩み寄って、今後もコミュニケーションを図っていきたい。

そして頼むから会話の成立率を上げてほしい。いや、上げてみせる。いつか爆笑も拜んでみせる。もつと喉使おうよ、いっばい喋りなよ。

二十七歳の男性が、「いただきます」と言って照れくさそうにご飯を食べている。その様子を、私は確固たる決意を持ってじつと観察した。

2 奥さん、すんつとなる。

朝目覚めた時に、ベッドから抜け出すのが辛くなっていると、冬の始まりを実感する。ピンと張り詰めた、冷たい空気。二度寝しそうになる体を無理やり起こして、背筋を伸ばした。

「どうとう言っちゃったあ……っ！」

昨晚の自分の言動を思い返して、思い切り頭を掻きむしった。興奮が薄れ冷静な思考を取り戻した途端、後から後からなんとも言えない感情がやってくる。

昨晚の私とはかく興奮し過ぎだった。改めて、父の会社や家族のことを考えると、頭を抱えて唸り声を上げてしまう。

彼に思っていることを言ったこと自体は全く後悔していない。彼との間にコミュニケーションは必須であるし、間違ったことを言ったとは思わない。家事をさせてくれない理由を教えてもらえないことに腹を立てているし、暇ぼかーんは嫌だし、無視すんな、返事くらいしろとも心の底から思っている。

そう、やっと言えてよかったのだ。なのに、それと同じくらい湧き上がってくるこの気持ち。これは多分……罪悪感だ。家族に対する、罪悪感。

寝室の壁に掛けられている、なんともスタイリッシュな時計に視線を走らせる。時刻は朝六時。そのそとベッドから抜け出した。

パジャマを脱ぎ捨て、黒のコットンパンツに足を通す。合わせるのは、襟ぐりが大きめに開いているニットのセーターだ。

気持ちと一緒に下がってしまいう肩に手をやりながら洗面所へ向かい、洗濯物を洗濯機の中へ放り込んだ。洗剤と柔軟剤と衣料漂白剤をそれぞれの投入口に流し入れ、こんな時でも浮かぶ喜びと共に、ニヤと唇の端を上げる。

どうして、と聞かれても非常に困るけれど、私は衣類関連の家事、とりわけ洗濯機を稼働させるまでの一連の動作が、めっちゃくちゃ好きだ。掃除や料理は大して得意ではないけれど、これだけは胸を張って得意だと言いつける。全く苦にならない。それだけでなく洗濯物を干すのも、畳むのも、アイロンをかけるのも、もう全部好きだ。

(書類上の) 旦那様は私の洗濯技術やアイロン技術を信用していないのか、ワイシャツはすべてク

リーニングに出してしまうし、入籍して一ヶ月ほどはパンツも洗わせてくれなかった。

パンツについては恥^はらっていたのかもかもしれないと推察しているので、なんとも言えないところだけ。私は自分のパンツを堂々と浴室に干していたので、その推察に至るのもだいぶ時間がかかった。

パンツはパンツでそれ以上でも以下でもない、日々活躍してくれる下着だ。洗濯機に放り込んでしまえばみな同じなのに、彼の価値観を探るのはパンツひとつとっても難しい。

……頭の中でパンツを連呼しているのは、現実逃避を脳が願っているせいだろうか。もうパンツの話はこのくらいにしておこう。

「あれ……?」

洗面所を出ようとしたところで、見慣れない踏み台があることに気付いた。置かれているのは収納の真下だ。ちょうど私が、棚の物を取るのに苦労していた場所である。

まただ、と、淡いピンク色の踏み台を見て目を瞬^{またた}かせる。これで三つ目になるだろうか。一体、彼はいつどのタイミングで見っていたのだろう。

ぱたぱたと長い廊下を駆けてリビングに顔を出すと、すでにスーツを着込んだ彼が、コーヒーを飲みながらソファで新聞を読んでいた。毎朝の光景だ。

「おはようございます」

いつもなら声をかけても、視線を新聞に落としたまま、小さな声で「ああ」と言うだけ。

けれど今日の彼はご丁寧^{ごとうじん}に新聞を閉じてから顔を上げ、私と目を合わせた。

いつもと違う態度に、心臓が嫌な音を立てる。

しかし彼はそのまま、新聞を膝の上で畳み、どうしてか動きを止めてしまった。

私の顔に、なにかおかしな点があるのだろうか。なんとなくぺたぺた自分の顔に触れて確認していると、(書類上の)旦那様は突然立ち上がった。それはもう驚くべき俊敏さで。それから、いそいそと仕事用のバッグを手に取り、私の横を通り過ぎていく。

その際に、とてもとても小さな声で「おはよう」と言ったのが聞こえたのは、多分、恐らく、空耳ではないと思う。

「お、おはようございますー！」

昨日までは「ああ」を連発していた彼が、挨拶を返してくれるだなんて！

一晩たつても、まだ私の訴えを行動に反映させてくれているようだ。驚きに目を見張ってしまう。「あいつ、洗面所の踏み台ありがとうどうございました」

足早に玄関へと向かう彼を追いかけながら、彼が新たに用意してくれた踏み台について、お礼を述べた。

悲しいかな、私は背が低いので、洗面所に限らず高い位置にある大抵の収納棚に手が届かない。

そういう時はジャンプしたり、ダイニングの椅子を運び込んで取ったりしているのだが、その姿を見られていたのかもしれない。理由はよくわからないが、彼がいつの間にか用意してくれる踏み台の存在は大変ありがたいのだ。

最初に踏み台を発見したのは、キッチンだった。次がシューズクローゼットで、今回は洗面所。

正直、ひとつを使い回せばいいよねと思ったりもするけれど、ありがたいことに変わりはない。すっかり身支度を整えた彼が、革靴に足を入れる。

「あれ？ 燈哉さん、待って下さい」

無言でドアノブを掴んだ彼を慌てて引き止めた。

近くで見た彼の顔色が異常すぎる。真っ青を通り越した土色だ。

「体調が悪いんじゃないませんか？」

私が割と強く引つ張ったせいで、よろけながら再度振り向いた彼の顔色はやはり優れない。優れないというか、おかしい。いくら「書類上の」とはいえ、様子がおかしければ私だって妻なのだから心配になる。

「もしかして熱があるんじゃない……ちょっと、失礼します」

近付いて顔を覗き込むと、土色だった彼の顔色が今度は真っ赤になった。

「もしかして熱があるんじゃない……ちょっと、失礼します」

体温の確認をするために、彼のおでこに触れる。短めの前髪が手の甲に当たって、少しくすぐつたい。

私が触れた途端に——と言ったら大袈褌かもしれないが——彼のおでこが急にしっとりした。人間こんなにも瞬間的に汗をかけるんだな、と驚いてしまうほどだ。

「ご、ごめんなさい、大丈夫ですか？」

不用意に触れるべきじゃなかったのかも。慌てて彼の額から手を離し、タオルを取りに急ぎ足で洗面所へ向かう。

玄関に戻って（書類上の）旦那様に手渡すと、まるで壊れたロボットののような動きで汗を拭い始めた。

「た、体調は、悪くない……」

小さく首を横に振る彼を見て、仕事に行くために誤魔化しているのだと気付く。そういえば父もそうだったな。うちの場合は、熱を出してもなかなか仕事を休まない父に、母が度々ツクルして通勤を阻止していたっけ。

実家の両親のように、気心の知れている間柄ならツクルしてでも熱を測りたいところだ。しかし今の関係性では、とてもじゃないけど無理だろう。本格的なDV妻になってしまう。これからどんどん寒くなるし、こじらせないといけないけれど。

「いつてらっしゃい。無理しないで下さいね」

精一杯の想いを込めてそう告げると、目の前に突然手が伸びてきた。彼の左手だ。

驚いて頭を引くと、その手の動きがびたりと止まる。綺麗な形の唇が薄く開き、音にならない声でなにかを呟いた。残念ながら全く聞こえなかったけれど。

「……いつてきます」

私が目を白黒させているうちに、（書類上の）旦那様はそう言って家を出て行った。

——なんですか、あれは。あれは、なんなんですか。

「いつてきます」の前にも、なにかを発言したようだけど、なんだったんだろう。

もっと頑張つて喉を使つてくれれば、聞き取れたのに……！

私はため息を吐き出しながら、自分の朝食を作るべくキッチンへ向かった。

そしてその日の夕方。いつもよりかなり早い時間に、彼から帰宅を知らせるメールが届いた。

慌てて食事の支度をし、掃除をしようとお風呂場に駆け込んだところで、洗剤が切れていることに気付く。

買いに行こう、そう思つてすぐに、万が一彼より帰宅が遅くなつたらまずいと思い直し、メッセージを送った。お互い用事がある時に送り合うだけで返信はないから、どうせ今日も来ないだろうと思ひながら。

そして、スマホと財布を手に家を出ようとしたタイミングで、メールの受信を知らせる陽気な音楽が鳴り響く。

なんと、彼から返事がきたのだ。届いたメッセージはたった一言。

『もう着くから』

「もう着くから、一体なんだと言うのだね……」

私はスマホの画面を見つめながら無表情で呟いた。鼻白んで、全体的にすんつとなった。

“もう着くから”のあとにくると予想できる一般的な言葉は、“行くな”だろうか。考えてみるけど、答えはわからない。

——だから言葉が足りないんだって、圧倒的に！

ふてくされながら靴を脱ぐのとほぼ同時に、背後でドアを開錠する音が響く。驚いて振り向くと、

そこには（書類上の）旦那様が。

「お、かえりなさい……」

すぐって、本当にすぐくすぐだっただらしい。

「車、出すから」

「はい？」

彼は靴も脱がずにビジネスバッグを玄関へ置くと、すぐさまドアノブに手をかけた。そしてそのまま玄関の扉を押さえ、ただただ視線を送ってくる。

「もう着くから」のあとに続くのは、待っている。だったのか。まるでクイズをしている気分だ。

「大丈夫ですよ、ひとりで行けますから。雨宮さんにも悪いですし」

彼にはお抱えの運転手さんが付いており、毎日の通勤も車で送迎してもらっている。

一応私も送迎を頼んでいいことになっているけれど、どうにも世話をかけるのは忍びないと思ってしまう。

しかし、彼は玄関の扉を押さえたまま、ゆったりと首を横に振った。そしてスーツのポケットから鍵を取り出し、チャリチャリと鳴らす。

「あ、燈哉さんが運転して連れて行ってくれるんですか？」

つまり、運転手さんはもう帰ったのか。

運転手さんが送迎に使う車とは別に、彼個人で所有している車もあるので、そちらで送ってくれようとしているのだろう。

クイズのあとは連想ゲームだ。だから喉のどを使おうよ、とまた思った。

「いえいえ、燈哉さんは休んでいて下さい。本調子じゃないでしょう？ ドラッグストアはすぐそこですし、わざわざ車を出してもらわなくても大丈夫ですから」

ぶんぶん、彼が大きく頭あたまを振る。それから何度か攻防が続く、結局私が折れた。彼がぼつりと呟いた言葉に、どう返したらいいのかわからなくなってしまったのだ。

「もう遅いし、危ないだろ」

空は暗くなっているとはいえ、まだ七時過ぎ。この時間ならば習い事帰りの小学生だっただ道を歩いているだろう。

「……行くぞ」

一応心配してくれているらしい。かなり過保護だと言いたいところだが、さすがに口を噤つぶんだ。こうして気遣ってくれるのに、どうして家事のことになると私の意見を聞いてくれないんだろう。会話してくれないのはなぜ？ 蔑あざむろにされてるわけじゃないと感ずるけど……謎は深まるばかりだ。

扉の外へ出ると、ひんやりとした冷たい空気が頬を撫なでた。エレベーターに乗り込み、会話もなのまま地下駐車場へと向かう。駐車場へと続く重い扉を開けてくれた彼に小声でお礼を言うと、それよりもっともっと小さな音量で、頭上から囁き声が降ってきた。

「……たがいま」

言い終えてから、わざとらしく咳払いをした彼が、無表情でくしゃくしゃと頭を搔かく。

タイムラグのある帰りの挨拶と、思いの外かわいらしい吹き方に、私は思わず大笑いしてしまった。

かわいい。彼をそんな風に思ったのは、初めてだった。自分で自分に驚いた。

「おかえりなさい」

燈哉さんって、基本的には素直な人なのかも。結婚して半年もたつというのに、ほぼコミュニケーションションゼロのままここまでできてしまったので、実際のところ彼がどんな性格なのかよくわからないのだ。

でも今、目の前にいる彼は「いただきます」だけじゃなく全部の挨拶をちゃんとしようと努力してくれている。

——今度はバズルかな、と胸の内を呟いた。

“水嶋燈哉”という人を形成するピースを一つずつ集めて、彼がどんな人なのか、知りたいと思う。たとえそこに愛がないとしても、日常生活を円滑に送るために。

前向きな気持ちで車に乗り込み、ふたりでドラッグストアとスーパーを回った。

頼んでもいないのに、彼がわざわざいつものスーパーへ立ち寄ってくれたのだ。

——これは一歩前進かも、と上機嫌でいたのも束の間。

買い物中、私が投げかけたいくつかの質問に、彼はひとつも答えなかった。

それだけではなく、反応してもらえない質問に私が自分で答えたら、ご丁寧のため息までつかれる始末だ。

さつきまで、せっかくな気分だったのに。スーパーからの帰り道、私は彼と同じくらい無表情で助手席に座っていた。

——私はその日、げらげら笑いのどん腹立てな一日を過ごした。締めくくりが、どん腹立てな出来事だったのはいただけないが、こんな日も悪くないと思えたのだ。

3 奥さん、友人を招く。

「お邪魔します」

「カナ、久しぶりっ！」

数日後、土曜の昼下がり。右手に私の大好きなシュークリームを、左手にワインをぶら下げて、あらゆる意味で最強の友人がマンションを訪れた。

「おーおー、お嬢様生活に逆戻りね」

都心の景色を一望できる大きなガラス窓から外を眺めて、カナが笑う。

最強の友人こと上原カナとは幼稚園の頃からの付き合いで、今でも心を通わせてくれる大切な存在だ。

カナとは価値観がびつたり重なるわけではないけれど、私の性質や好みに理解を示してくれる。

そして愛情いっぱい文句を言いながら、なんにでも付き合ってくれるのだ。

結婚する前は週に一度必ず顔を合わせていたのに、今回は随分間が空いてしまった。

「あれ、件の旦那は？」

「仕事だよ。今朝、突然休日出勤になったの」

「なるほど」

「いきなり呼び付けてごめんね」

「なに言ってるのよ。ずっと桜に会いたかったし、新居も見てみたかったの。ちょうどよかったわ」

私こそ、完全なるカナ欠乏症に陥っていたのでやっと会えて本当に嬉しい。

自分のこの行動は彼にとって感じ悪いことこの上ないと気付いた時、大変申し訳ない気持ちになった。ごめん、(書類上の)旦那様。

「ねえ、このマンション、丸ごと旦那の持ち物？」

「ううん、燈哉さんのお父さんの持ち物」

「へー！ じゃあこの部屋は結婚祝いでわけか。インテリアコーディネーターを雇ったの？」

「そうみたい。よくわかるね」

「どう考えても桜の趣味じゃないもの」

相変わらずの鋭い指摘に、私は「ははは……」と乾いた笑いを返した。

確かに、リビングにもキッチンにも、私の大好きなポップな色合いのものはほとんど存在しない。あるのは彼が用意してくれた踏み台くらいだ。

私が初めてこの部屋を訪れた時には、すでにすべての家具が完璧に配置されていた。家具も食器も家電も装飾品も、一級品ばかり。いいものばかりなのだとは理解しているけど、ちよつと落ち着かない。ここに少しでもポップななにかが混ざれば、少しは居心地がよくなるのかな……と、半笑いで考えてしまう。

「しっかし随分いい部屋をもらったのね。このリビングに、あんたが住んでたアパートの部屋が五つくらい入るんじゃない？」

「それを言わないで！ 鍋が恋しくなるから！」

ソファに腰を下ろしたカナが、くすくすと笑いながら、細く綺麗な指で座面を一撫でする。これいいわね、と、目の肥えている彼女が評価を下した。

「桜、ワイングラスを出して」

「あ、やっぱり今から呑むんですね」

「当たり前でしょう？ そのために持って来たんだから」

「はいはい」と返事をしながら、ワイングラスと簡単なおつまみを用意して、私も彼女の隣に腰を下ろす。

「それで？ 無口すぎる旦那に盛大に怒り狂ったあとはどうなってるの？」

「狂うほど怒っては……ないと思う……」

「そう？」

カナには逐一愚痴メールを入れているので、私が大暴走してしまったことも、もちろん報告済

みだ。

普通の生活を目指して、彼とコミュニケーションを図るべく躍起やっつきになっていることも。

「挨拶あいさつはしてくれるようになったよ。『ああ』って言うだけの返事もなくなった。あと私が開き直った」

「そう。開き直ったのはいいことだと思う。そうするべきよ」

「でも相変わらず家事は阻止そしされる。なんで？」

「私に聞かれても」

苦笑いをしながら、カナがグラスにワインを注いだ。

……さて。果たして（書類上の）旦那様が休日出勤中に嫁が酒盛りさかもをして、いいのだろうか。私の価値観では、そこはかとないうしろめたさを感じるのだけど、でもカナと呑める機会なんてこれを通したら当分ないかもしれない。

まだ日が高いし、彼が帰ってくるまでには、多少なりともアルコールが抜けるだろうか。抜けると、いいな……！

うむ、と、ひとつ頷いて、結局カナからワイングラスを受け取り、すぐに乾杯をする。

「家事を阻止そしされるって言っても、旦那がいない間に掃除とかはできるわけでしょ？」

「掃除はね、ほら。ほぼあの子がやってくれちゃうから」

ウィーン……と、控え目なモーター音を響かせながら、忙しそうにフロアリングを駆け抜ける丸い物体。すべての部屋に完備されているお掃除ロボットは、私よりも上手に部屋中を綺麗にしてく

れる。彼は家電にこだわりがあるのか、うちにあるのは良品質で最新のものばかりだ。キッチンに鎮座ちんざしている、彼愛用コーヒーメーカーもそのひとつ。冗談みたいな値段のドイツ製の代物しろものである。コーヒーも掃除も、機械の性能には敵かたわないので落ち込んだりもするけれど、君たちのことは好きだ。いつもありがとう。

「……なるほど」

「燈哉さん、休日以外は朝ご飯を食べないから日中に片付ける食器も出ないし、買い物は日用品だけなの。紙類の消耗品は定期便で、食材はインターネットで頼む宅配サービスに入っちゃってるからほとんど必要ないんだ。やることって言ったら洗濯とお風呂掃除と、せいぜい埃取りほちりくらい。あ、夜ご飯も作るけど。ため息で文句言われないのは洗濯だけだよ」

「そう。洗濯も取り上げられてたら、桜はもっと早く爆発してたかもね」

「ええ、私もそう思います」

「パンツ洗わせてもらえようになつてよかったわね。おめでどう」

「ありがとうございます」

私は真顔のまま何度も頷いた。

「桜が異常な洗濯好きなこと、旦那は知ってるの？」

「さあ。言ったことないから知らないと思うよ。そもそも会話が成立しないもん」

「んー……。定期便とか宅配はうちの実家もそうだし、仕方ないんじゃない？ そんなに暇なら、下の階のジムで体を鍛えたり、ヨガの先生を呼んだり、エステティシャンを呼んだり……したらど

う？ 旦那の金で思う存分買い物して回るとか。うちの母や桜のお母様みたいに」

「私がそういうの性に合わないって、わかっててわざと言ってるよね……？」

「ま、そうよね。桜には無理でしょうけど。それでも、ハウスキーパーやコックを雇^{やと}ってない分、結構やることはあるのね。よかつたじゃない」

「いや、よくない！ よくないんだよ！」

カナの言葉に、拳^{こぶし}を握^{にぎ}って反論する。それからおつまみに出したチーズを口に放り込んで、ワインを呷^{あは}った。

「それが三日前からさあ！ 燈哉さん、出勤前にお風呂掃除して行くようになったんだよ！」

私がぶーぶー文句を言うと、カナはグラスをテーブルに置きながら豪快に笑った。私はすかさず話を続ける。

「有り得ないと思うんだ。そっつんなに私の洗い方が気に入りませんか。悔しいから今日は五時起きたのに、すでにお風呂ピカピカでしたよ。いつ寝てるんだろうね、あの人。私がベッドに入る時、大抵まだ仕事してるんだよ？ 早く寝なさいよ、と。そんで無駄に早起きしてくれるな！ と、声を大にして言いたい！」

「すでに大きいから。うるさい」

顔をしかめたカナに、「ごめん」と肩を竦^{すく}める。

「なに、旦那と寝室別なの？」

「寝室？ 一応一緒だよ。ベッドは二つあるから別だけど。ただ、燈哉さんはベッドで寝たことな

いんじゃないかなあ」

「はあ!？」

「あ、やつぱり体に悪いよね？ 燈哉さん、毎晩このソファで寝てるんだよ。仕事しながら眠^ねっちゃうみたい」

そう、そうなのだ。私が眠りに入る時、彼は大抵このソファでパソコンと睨^{にら}めっこをしている。にも拘^{かか}わらず、平日は私よりも早く起床している。土日だけは朝寝坊をすると決めているよう^{よう}けど。

ベッドで眠^ねったほうが疲れもとれますよ、と言^いって見たことはあるけれど、例^{れい}によって華麗^{華麗}に無視されたので、結局そのままになっているのだ。

「そんなに私と同じ部屋で寝るのが嫌なのかねー。あー、こうやって話してみると……やつぱり嫌^{きら}われるのかなあ？ でもなあ……」

「疑問には思うけど確信ではないって口調ね。つまり、嫌^{きら}われているわけではないと思う要素が多^{おほ}いってことかしら」

その通り！ と私が手を叩くと、カナが話の先を促^{うなが}す。

「なんていうかね、これだけ無視されてるのにおかしな話^{わら}なんだけど……、嫌^{きら}われるとか、邪魔^{じゃま}だと思^{おも}われているんだろうなって感じる^{かん}ことが、一切ないんだよね」

そう言^いって私は、ぼんぼんと、革張りのソファを叩いた。今、私が座^まっている場所は、本来彼の定位置だ。

「どういふこと？」

カナが怪訝な表情を浮かべるのも無理はない。どう説明すれば彼の不思議さが正しく伝わるか、少しの間、黙って考えた。

例えば、彼には自室もあるのに、ほとんどの時間をリビングで過ごす。

私がテレビをつけると、なにをしても必ず手を止めて一緒に見る。テレビ画面を見つめながらうっかりなにかを「かわいい」と言おうものなら、後日確実にその品物が宅配される。

仕事が終わったらほとんど毎日まっすぐ家に帰ってくるのも、乗り物好きで多趣味なはずなのに休日ずーっと家にいるのも、買い物に付き合ってくれるのも。

自意識過剰かもしれないけど、嫌われてたら、そんな行動は取らないんじゃないかと思う理由だ。それらすべてをカナに話して聞かせた後で、頭に浮かんだ出来事を更に追加する。

「あとね、なんて言うのかな、家の中で困ったなあってことがあると、必ず数日以内に解消されるの。いつの間にか各所に踏み台が設置されたりとか！ 私、別に燈哉さんにいちいち言ってるわけじゃないんだよ。むしろ、滅多なこと口にしたらいけないなって最近ばかり心にかけてる」

「ふーん。ああ、お土産もそうじゃない？ まだ続いているの？」

「あ、そうだね。続いているよ」

「それって彼が買って来てるの？ 頂き物とか、秘書とかに用意させてるんじゃないんで？」

「黙って手渡されるから最初はもらい物なのかなって思ってたんだけど、燈哉さんのお父様が電話で教えてくれたの。あいつ、桜ちゃんのためにケーキ屋に並んでるらしいぞって。ちょっと見てみ

たいよね、ケーキ屋に並ぶ燈哉さん」

深い深いため息を吐き出したカナが、なぜか呆れ果てた視線を送ってくる。

「なにに？」

「なにも」

（書類上の）旦那様は私が家事をするため息で文句は言うけど、そこに強烈な嫌悪を乗せているわけではない。私が猛烈に鈍くて、気付いていないだけなのかもしれないけれど。

だからこそ、不思議でたまらないのだ。私が家事をするのをなぜ嫌がるのか。

不思議と言ったら、彼が私と結婚したこと自体も謎である。

彼のお父様が取締役を務める水嶋グループは、金融、自動車製造、製薬、建設、観光などを幅広く展開している大企業だ。私の父が経営する倉木コーポレーションとは比べものにならない規模である。

政略結婚なんて、互いにメリットがあるからこそ成り立つわけだけど、水嶋の家と、私の実家とは、企業としての力に差がありすぎる。

この結婚で利になることは、どう考えても倉木のほうが多いのだ。水嶋家にとっては、私たちの結婚が破綻したとしても、大した痛手ではないはず。

「燈哉さんには、私のことを構わなきゃいけない理由なんてないんだよ。お互いが派手に遊んだりしなければ、結婚って事実があるだけで世間体は保てるわけだし」

「うーん……」

「頑張らなきゃいけないのは、私のほうなんだよ。余計なことを言っちゃいけないし、燈哉さんの嫌がることもしちゃいけないって思ってたんで我慢してただけ……」

「半年、ね。随分長いこと我慢したわねえ」

「うん……もう鬼のように長かった……。禿るかと思った……」

「禿てもおかしくないと思うわ。ストレスは頭皮にいきやすいもの」

「とにかく会話が成立しないのがストレスでね。家事をやっちゃだめならだめで理由を教えてほしいのに、黙っちゃうし」

私が熱弁を振るうと、カナはなにやら難しい顔をして黙り込んでしまった。

「カナ、聞いている!? 無口は燈哉さんだけで十分なんだけどっ」

「聞いているわよ。人として、いろいろ問題ありって感じはするのよね……。桜の存在を気にかけてるの自体はいいことなんだけど、やり方がなんか強引で気に入らないし。無口な割に顔色は忙しいうつても、ちよつと引つかかる」

「ああ、顔色は確かに忙しいね……。赤くなったり青くなったり……。だからその思いを口にしていただきたいのよ私はっ」

「家の都合で結婚したわけだし、嫌われてなさそうなら放っておけばいいって思うけど。なんにもなくても文句言われないんだから、楽でしょう。でも、桜はそうじゃないわけだ」

「うん、楽じゃない……。全然楽じゃない……」

「つまり、あれでしょ? たたでさえ桜にとっては贅^{ぜい}な空間に、自分のことを気にかけてる旦那がいて、なにもしないで過ごすのは嫌なんでしょう?」

「そうっ、そうなんだよ!」

「楽しんでりゃいいのに。桜らしいわ」

カナのハイペースに釣られるようにして呑んでいたら、あつという間にワインボトルが空^{から}になってしまった。

ボトルを抱えたままソファに転がって考えてみても、やっぱりわからない。でも、わからないからっていじけていたら、なにも解決しない。そんなの絶対に嫌だ。

傅^かかれる生活も、なにもしないでただ暇な時間を過ごす生活も、真^まつ平御免^{びらごめん}。

政略でもなんでも結婚は結婚で、私は彼の奥さんになったんだから。

「うん、やっぱり頑張ってコミュニケーションを取るしかないね。あの口をこじ開けて、いつか爆笑を……!」

「え、爆笑必要?」

「うん。そのほうが楽しいじゃない。一発ギャグでもするべきかな?」

「頑張る方向違うって」

じゃあどうすれば……。と頭を抱えると、カナはなぜか目をキラキラと輝かせて言った。

「ねえ、桜は旦那とやる覚悟はあるのよね?」

「ええ!?!」

話の方向をガラッと変え私を驚かせた彼女は、涼しい顔をしてクラッカーをかじっている。

「夫婦なんですよ？ 当然のことじゃない」

「や、私もそれなりの覚悟はしてたよ。してたけど、燈哉さんとそういう雰囲気になったことないし」

「桜、処女だもんね。いい雰囲気になったとしても、気付けると思えない。旦那も男なんだから、溜まる生き物なのよ？」

「ど、どっかで発散してるんだよ、きつとっ」

「ほほ毎日、仕事終わりにまっすぐ家に帰ってきて？ 休日も桜にべったりなのには？」

「なにその言い方！ べったりしたことなんかいいわ！」

「精神的にっつことよ。よしわかった、桜と旦那が仲睦まじい夫婦になるために、私も協力するわ。作戦は任せて」

「だから言い方……っ、別に仲睦まじくしたいんじゃないやなくて、私は普通の生活を送りたいっただけで……」

「まずはそうね、夜は寝室で寝てもらおうようにお願いしてみなさいよ」

あまりの急展開ぶりに、全く付いていけない。

お掃除ロボットのモーター音が、無駄に広いリビングに静かに響き渡る。

すかさずカナから視線を逸らしてそちらを注視すると、お掃除ロボットは充電のために基地へと戻るところだった。

私は君が充電しにいくところを見るのがすっかり日課になっているよ……、かわいくて好きだ……

「はい、作戦会議から逃げない」

「逃げたくもなる！」

カナはタイトスカートから覗く足をやたら上品に組み替えて、呆れたようにまたため息を吐いた。ため息恐怖症の私には辛いリアクションだ。

「あんたたち夫婦の問題なんて、他人から見たらすっごい簡単よ。桜の考えは間違っと思ってわ。コミュニケーションを取ればいいだけ。そうすれば、爆笑を拝める日もすぐかもね。とりあえず寝室で寝るように、話してみなさいよ。やるかやらないかは旦那次第だし、元々覚悟してたならいいじゃない」

「ねえ、なんでやるとかやらないとかいう話になるわけ……！ 意味わかんない。これ以上謎を増やさないでくれる!?!」

話は終わった、とばかりに立ち上がる彼女のあとを追う。

「謎でもなんでもないわよ。一緒の寝室で寝ることになったら、すぐに訪れる展開でしょ。とにかく、ソファで寝るのが体によくないのは事実なんだし、ちゃんと提案してみなさいよ。そういう方向から攻めれば、うまくいくから」

「あれ、待って、そういう話だったっけ!?!」

「まあ、またなんかあったらいつでも聞くから。じゃ、頑張っつて」

「適当！ 酷い！」

私がしつこくくだがってみても、カナはどこ吹く風で玄関へ向かう。そしてすでに、ピンヒールのパンプスに足を入れている。彼女が、諦めの悪い私の頬をぐいっと引っ張ったところで、玄関のドアが開いた。

冷たい空気が一気に流れ込んで来て、カナに引っ張られて伸びきっている頬に当たる。

「と、燈哉、さん……」

夫の不在時に友人を家に上げ、昼間から酒盛りしていたこの状況がうしろめたくて、ぱっと視線を逸らしてしまった。

一瞬見た彼は、どうしてか、お酒を呑んでいる私と同じくらい頬を上気させていた。その上、肩で息をしていて、コートが必要なこの季節に汗まで光らせていた。

「こんにちは。ご主人がお留守の間にお邪魔して申し訳ありません。桜の友人の、上原カナと申します」

ようやく私の頬から手を離れたカナが口を開いた。その姿は完全によそ行きに武装していて、声色まで違う。

一方（書類上の）旦那様は、玄関に人がいたことに驚いたのだろう。珍しく驚いた表情を露わにしたまま、小さな声で「どうも」と呟いた。

「あら、桜にお土産ですか？」

カナの声を聞き、なんの話だ、と疑問に思い彼の手に視線を飛ばす。するとそこには両手サイズ

の白い箱が握られていた。

「ええ、まあ」

気まずそうに顔を歪めた彼が、白い箱を大きな体のうしろに隠す。そしてそのまま、そっぽを向いた。

そんな彼を見たカナは、大きな瞳を三日月みたいに細めて、それはそれは楽しそうに笑った。こういう顔をする時、彼女は大抵余計な一言を放つのだ。

「愛妻家ですね。安心しました。そうそう、桜が、ご主人にお話があるそうですよ。聞いてやって下さい。お邪魔しました。桜、またね」

腕を引いて止めに入っても、カナは私の手を蚊でも叩くようにぼちんと弾く。そうして、するりと家から出て行ってしまった。

予想通り、とんでもない爆弾を落とした彼女の背を見送ってから、天を仰ぐ。真横から送られてくる彼の視線が、矢のように突き刺さる。「カナってば余計なこと言いやがってもう困っちゃいますー」なんて、フランクに言葉を発せたらどんなに楽だろう。

残念ながら、私と彼の間には、そんな気安い関係性は築かれていない。

「お、おかえりなさい……」

視線に耐えられなくなり、なんとかにかいつこり笑ってそう言ってみた。

「……ただいま」

やっと返してくれるようになった帰宅時の挨拶。彼の目がなんとなく怖く見えるのは、気のせい

だと思いたい。

私は戦々恐々としながら、彼と並んでリビングへと向かった。

4 旦那さん、絶望する。

リビングのローテーブルを片づけている妻を、俺——水嶋燈哉は凝視してしまふ。彼女の姿はどこか落ち着きがなく、視線も泳いでいるように見える。

これから妻にされるであろう話は俺にとつてもっとも聞きたくない話題で、絶望的なまでに気分が落ち込んだ。

やはり、数日前に彼女を怒らせてしまったことが原因だろう。

彼女との結婚生活が始まってからというものの、かなり浮かれていたのは自覚している。

それでも、自分としては常に最善を尽くしていたつもりだった。

入籍してから彼女を怒らせてしまうまでの半年間は、ただ幸福の中にいた。休日はその最たるものだ。彼女と長い時間同じ空間で過ごせる。彼女の買い物へ付いて行ける。なんと言っても、休日だけは三食彼女の手料理を食べることができる。

彼女がせっかくな声をかけてくれても、どう答えればいいのかわからず、押し黙ってしまう自分のため息を吐く瞬間も多々あった。それでも彼女の側にいられる幸せを噛みしめて、日々を過ごして

いた。恐らく、そういう浮かれた部分が、いけなかったのだろう。

——どうして家事をさせてくれないんだ、ジェスチャーやため息ではなく、きちんと言葉で話せ。

あの日、彼女はそう言って怒った。

俺が意識的に行っていた振る舞いこそが、彼女の怒りに触れたのだ。

どうしてだろう。なぜ、怒らせてしまったのか。

怒りの原因を提示されても、情けないことになぜそうしてはいけなかったのかわからない。

「あの、きゅ、休日出勤お疲れ様です。今日は、お帰りが随分早かったですね」

声の上擦っている様子すら愛らしい。

今この瞬間も、妻のすべてがかわいくてかわいくて仕方ない。

だからこそ、その分、焦りと不安が大きくなる。絶望も。

「……通常業務ではないからな」

妻と会話をする時は、落ち着いた話し方をするように心掛けている。最低限の言葉で済むように、ともすれば、自分としてはかなり冷たい話し方になるように。

結婚生活に焦りと不安が生まれてからも、彼女と長い時間を共に過ごせる休日が至福であることに変わりはない。

だから今朝、どうしても出社して欲しいと連絡を受けた時は、仮病でも使ってやろうかと本気で考えた。そんなことはできるはずもないから、考えるに止めたけれど。

渋々出社し、トラブルを解決した後すぐに迎えの車を呼んだ。一刻も早く帰宅したかったから。

しばらく待つっていると、運転手から『渋滞にはまって到着が遅れる』という報告を受け——俺は瞬時に『電車で帰るから、迎えはいい』と伝えた。あの時の運転手の声は、ものすごく驚いていた。そして、その時、近くにいた秘書は呆れた表情を隠そうともしなかった。

しかし俺は構わず会社を出て、近くのケーキ屋に駆け込んだ。近頃、すっかり常連になった店の店員には、未知の生物でも見るかのような目を向けられてしまった。『釣りはいらぬから急いでほしい』という一言が余計だったのだろうと、少し冷静になった今ならわかる。

久しぶりに切符を買った。久しぶりに電車に乗った。少しの時間も待てなかった。一秒でも長く、彼女と共に休日を過ごしたかったから。

「あの……、すみませんでした」

控えめに俯いたその様は、玄関の外まで聞こえるような浣刺とした声で話していた彼女とはまるで別人だ。

妻が謝ることなど、なにもない。なにひとつ。なにを詫びることがあるというのだろう。

つい、眉間に皺が寄ってしまう。彼女といると感情を隠すのに酷く苦勞する。表情を取り繕う努力はしているが、咄嗟のこととなると、まだポロが出てしまう。

「燈哉さんが休日出勤をなさっている間に、勝手に友達を呼んで、しかも昼間からお酒を……、呑んでしまいました。すみませんでしたっ！」

空になったワインボトルには、リビングに入つてすぐに気付いていた。なるほど、どうりで妻の柔らかそうな頬がいつもより赤みを帯びているわけだと、納得はしたが不愉快な気持ちになどなる

はずがない。

友人を招いて酒を呑むくらい、なんの問題もない。ここは彼女の自宅なのだから。

それでもなお、すまなそうに顔を歪めて、上目遣いで俺を見る彼女。身長差は三十センチ以上。百五十センチと小柄な妻が俺を見る時、上目遣いになるのは必然と言える。必然だ。わかっている。けれど……、下から見上げるような仕草の、かわいらしさといったら。どうして、妻はこんなにかわいいのだろう。

口元が勝手にふにやふにやと笑みを作ろうとする。それを、必死に堪えた。

「それから、友達が変なことを……。あの、カナの言ったことは忘れて下さい。なんでもありませんから」

友人への怒りを、思い出したのだろうか。彼女の眉間にも皺が寄る。そんな表情もかわいくてたまらない。

しかし、浮かれている場合じゃない。今、彼女が持ち出した話題は、俺を絶望に突き落とすだろう。

——婚姻という事実だけがほしかったわけじゃない。

「倉木」の家の娘だから、彼女と結婚したわけでもない。

自分と同じような境遇なのに、眩しいくらいに強くて優しい彼女だから、こんなにも焦がれて止まないんだ。

彼女に愛されたくて、滑稽にも偽りの自分を演じてしまうほどに。

どれだけ馬鹿げたことをしているのか、自分でもわかってる。

「俺に話があるのなら、言ってくれ」

そう言った俺を見て、妻が驚いている。

彼女の話すことならばなんでも聞きたいし、願いは叶えたい。

とはいえ、聞きたくない、叶えたくない願いもある。

……どうしても考えてしまう。なにがいけなかったのか、と。すべきことは貫いたし、この瞬間にも貫いているはずだ。

「え……と、いや、でも……」

妻は戸惑いながら呟き、果てには小さな手で頭を抱えて唸りだした。

苦悩しているのは、きつと自分の実家のことだろう。いらぬ苦悩だと教えてやりたい、けれど……、悪いが絶対に言わない。

妻がこれから口にする願いは、俺にとってはもつとも叶えたくない望みだ。すぐに手放してやるほど彼女への想いは軽くない。執着心は自覚している。

意を決したように、妻が唇を引き結んだ。それは彼女がなにかを話し出す前の癖のようで、結んだ唇は口角が上がっていて、とてもかわいらしい。

「も、もし、嫌じゃなかったらなんですか……、ん……？ 嫌じゃなかったらソファでは寝ないだろうから……あれ、やっぱり嫌なのか……!?」

……ソファ？ ……寝る？

俺の顔の横、斜め上を見ながら首を傾げて、妻は自分の発言に自分で訂正を入れている。

妻の話したい内容には心当たりがあったが、それはソファにも寝ることに、結び付かない。

俺も思わず首を傾げそうになったが、慌ててそれを止めた。

ジェスチャーはだめだ。彼女が嫌がっていたから。

「そのー、つまり……、ソツ、ソファで寝るのは体によくないんです！」

「……え？」

「だから、一緒に寝ませんか!？」

「ええっ!？」

予想外の話に驚いたあまり、またボロが出た。

思い切りリアクションしてしまったことを悔やんでも、後の祭りだ。

先日妻を怒らせてしまったこともあり、話の内容は離婚したいという旨一択だと思っていた俺は、あまりの驚きに思わず叫んでしまった。最悪だ。一瞬、艶っぽい意味での「寝る」を想像したため動揺を隠しきれなかったのだ。

ただ俺の出したボロに、妻は気付かなかつたらしい。自分の発言に驚いて、慌てふためいていた。妻の持ち出した話題が「離婚」に関したものではなかつたことに、とりあえず安堵する。

妻に対しては微塵も自信を持ってない俺の情けなさが、思考へ如実に表れている。するりと入り込んでくる不安や焦りは簡単に大きくなり、制御できない。とことん不甲斐ない……

しかし安堵は束の間だった。彼女の言葉を思い出す。

寝室で、一緒に、寝る？

……申し訳ないが、それも聞けない頼みだ。

『すぐには無理だが、努力はする』

自分でも呆れるような馬鹿な返答に、妻はなにも言わなかった。

しかし「意味がわからない」と顔にはつきり書いてある。当然だ。ソファで寝るのが体に悪いことなんて、子供でも理解できる。

それでも俺には、精神衛生上聞けない提案だった。妻の前でそういう素振りを見せたことはないから、彼女には絶対、理解できない理由だろう。

とはいえ妻から一緒に寝室で寝るよう提案されてしまったことに、少なからずショックを受けている。つまり彼女は、俺が隣で眠っても平気だと考えているということだ。それは……男として致命的じゃないだろうか。

その日、俺の顔色が終始優れなかったのは言うまでもない。

——彼女の理想の男になれる日は、まだまだ遠いようだ。

5 奥さん、旦那さんの誕生日とクリスマスに思いを馳せる。

『すぐには無理だが、努力はする』

その言葉の意味がさっぱりわからないまま十二月に入った。もう二週間もすれば、クリスマスがやってくる。

夕食の片付けを終えた私は、キッチンの隅に立ち、ここ数週間のことを思い出していた。

(書類上の)旦那様の寝室は、今もリビングのふかふかソファのままだ。相変わらず家事も阻止されるし、質問に対して一言以上返ってくることは少ない。彼のほうから話をしてくれるわけでもない。

それでも、以前よりはいくらか会話は増えたと、彼の表情がわかりやすく変化することも大分多くなった。無視されたり、すべてを「ああ」で済まされていた時とはまるで違う。

カナの作戦とやらは結局失敗に終わったわけで、やるとかやらないとかいう局面も迎えていない。冗談でも誇張でもなく、やることについての覚悟ならある。政略結婚なら、子作りは義務だと思いうから。跡取りがいらないとなれば問題になるだろう。

……もしかして『すぐには無理だが、努力はする』って、私とそういうことをする気になれるよう努力するって意味なのかしら。

それはそれでちよいと失礼じゃないか、と、私は若干切なくなつた。私だって別に積極的に望んでるわけじゃありませんからと毒を吐きたくもなる。

彼は私のことを、そういう目では見ていないのだろう。とはいえ、人として嫌っているレベルではない……と思う。以前より会話は増えたとし、関係も進展している、はず！

というわけで、ここで私は、また新たなコミュニケーションを試みようと思う。